

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集（旧版）第4巻、221頁の後ろから2行目から223頁13行目まで（「場所（一）」第8段落の後半＋第9段落）

【テキスト要約】

「対象其者を見る（221頁）」ことは、「主もなく客もない（222頁）」、いわば「知るもの」と「知られるもの」が直ちに合一する「直覚」として考えられるであろうと西田は推測している。この考え方に従えば、「直覚」は主客や有無の分別を本質とする「思惟とは全く異なるものと考えられる」。というのは、「直覚」は直接的な経験のように、知るものと対象（「知られるもの」）が直接に結合しているから、直覚的知識は直覚の外に「一般概念的なるもの（222頁）」を介しなくとも—西田に言わせば「意識の野といふもの」を離れても—それ自身によって成立しうるとされていると解釈できるであろう。

それに対して、西田は「直覚」の意味を見直すことによって、「直覚の背後に、意識の野とか場所とかいふものを認めよう」としている。「直覚といふのが単に主もなく客もないということの意味するならば、それは単に対象に過ぎない。既に直覚といへば、知るものと知られるものとが区別せられ、而も両者が合一するといふことでなければならぬ…知るものは知られるものを包むものでなければならぬ、否之を内に映すものでなければならぬ」という。ここで西田は「直覚」を二種類に分けていることが読み取れる。一つは、知るものと知られるものが一体となる直覚、いいかえれば「所謂直覚（221頁）」である。もう一つは、知るものが知られるものを内に包み、映す直覚、いいかえれば「対象をありのままに映すこと（221頁）」である。

西田は前者を「単に対象に過ぎない」と指摘することはどういうことなのか。論文「内部知覚」において以下のように記されている。

併し内部知覚に於ても、果して知るものと知られるものとが一致すると考へ得るであろうか。我々の内に現れ来るものは、「時」の形式に現れ来るのである。我が我の中に現れ来るものを知ろうとする時、現れたるものは既に過去に属するのである。我々は何時でも現在を捉へることはできない。現在とは我に対して理想的なる一点にすぎない、一つの極限点に過ぎない。マイノングが云って居る如く、唯現在線上の直接継続に於て結合するのみである。内部知覚といへども、単に推量の明証を有っているまでであって、ただ現在の極限に於て確実の極限に達すると考へ得るまでである。

つまり、直接経験としての内部知覚において、知るものと知られるもの（対象）が直接しているとは言えない。それらはただ「現在線上」において直接に継続しているからである。この点で、主客の合一としての現在意識は達することができない極限点であって、我々の反省によって推量されるもの、「確信」にすぎない。現在意識を意識することには推量の反省作用が働いていると考えられる。したがって、「直覚」は「直覚」として意識される以上、それはすでに対象化せられたものであって、かえって意識の「対象」となるものと考えべきであろう。たとえ「直覚は意識されない」ということさえ、すでに意識によって直覚の内容を「意識されない」という形で説明している。したがって、「直覚」といっても、それはつねに反省によってもたらすものとして、意識された「直覚」であって、直覚そのものとは言えない。これが「直覚も尚意識でなければならぬ」と西田は言う所以であろう。

それゆえ、「直覚的なるものがそれ自身を維持するには、やはり「於てある場所」というごときものがないとすればならぬ」。そうでなければ、直覚はただ対象にすぎず、それにおいて「知る」ことは成立できない。つまり、知るものと知られるものが「時」に於いて異なるものだが、「於てある場所」において、

両者が区別されながらなお結合しているのである。「内部知覚」で、西田は知ることは働くことではないと強調し、「知るとは知る者と知られる者と映す鏡が一つである（127頁）」といい、また「場所」で「自己の中に自己を映すことが知るといふことの根本的意義である」と語る。こうして、直覚の真義とは「知るものは知られるものを包む（223頁）」「否之を内に映す」ことであると考えられる。いいかえれば、所謂直覚の背後には「自己の中に自己を映す鏡（201頁）」としての場所が必要である。

こうした自らを照らす鏡はどのような論理的な概念意義を持っているのか。

「意識はどこまでも一般概念的背景を離れることはないと思ふ。一般概念的なるものが何時でも映す鏡の役目を演じて居るのである。我々が主客合一と考えられる直覚的立場に入る時でも、意識は一般概念的なるものを離れるのではない、却って一般概念的なるものの極致に達するのである」。

つまり、意識は「一般概念的なるもの」としての「場所」に離れることはない。ただ、意識の立場が「対立的なる無の場所（220頁）」・「物の影を映す場所」から「真の無の場所」・「物が於てある場所」に徹底すれば、判断の基礎となる「一般概念的なるもの」の意味が変わってくる。しかも、こうした意識の立場の深まりは、連続的な発展ではなく、「意識の野は真に自己を空うすることによって（221頁）」、即ち意識の立場のそれ自身の突破を通して、飛躍的に転換することをいう。いわば「否定の否定」である。したがって、「一般概念的なるもの」の意味は「対立的なる無（220頁）」の根底にある「一種の有」としての「類概念的なるもの（220頁）」が破られる所に、「真の無」となる、即ち、一般的なる物は全然何らかの有の意味を持たない、「単に自己自身を映す空しき鏡となる（206頁）」。というのは、映す物がないがゆえに、鏡が鏡自身を映す。しかも「その一般的方面が無なる故に、内容が一々創造的と考えられる（206頁）」。つまり、「一般的なるもの」としての場所はそれ自身を否定して絶対な無にして、それ故にそれにおいてすべての有を映すことができるであろう。一般的概念のもの徹底はそれ自身の否定となり、しかも否定が同時に肯定であることを意味している（204頁～206頁を参考）。それこそ「概念の矛盾」を意味しているように思われる。

このように、西田は「所謂直覚的も意識の野といふものを離れることはできない」、「直覚的なるものを映す場所は、直ちに概念の矛盾を映す場所ではなければならない」という結論に達した。

第9段落

「主客合一とか主もなく客もないと云うことは、唯、場所が真の無となると云うことでなければならぬ、単に映す鏡となるということではなければならぬ」。知ることの意味とは「知るものは知られるものを包む」「之を内に映す」ことであって、それは単に「働く」ということではない。しかも、それは「カント哲学」における「構成する」という意味でもない西田が考えている。この点を巡って、議論が進んでいる。

結論を先に述べると、「構成するといふことは、直ちに知るといふことではない。知るといふことは、自己の中に自己を映すと云うことでなければならぬ」。

カント哲学では、「知るとは形式によって質料を構成する（215頁）」ことである。つまり、認識主観は先験的形式・アプリアリによって、その外から与えられる感覚的な材料を整理整合して、それを客観的な認識対象として構成する。しかし、その場合、すでに認識主観と客観的对象という「主客の対立の考えから出発し」ているから、認識主観はそれ自身の内容を映して構成すると考えられないから、形式的な主観に過ぎないと思われる。「真のアプリアリは自己の中に自己の内容を構成するものでなければならぬ（223頁）」。

この点で、西田は「構成的形式の外にラスクの如く領域の範疇というものを考へ得るであろう。」つまり、場所は「領域の範疇」の如く、自己自身を限定して、一般概念的なるものを成立させるのである。す即ち「我々の認識対象界に於て限定せられた一般概念を見るのは、かかる場所が自己を限定するのである。場所が場所自身を限定したもの、或は対象化したものが所謂一般概念となるのである」。